
能力が使える世界の事情

ダダモレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力が使える世界の事情

【Nコード】

N1934Y

【作者名】

ダダモレ

【あらすじ】

通常なら1つの能力しかないはずなのに

理由は知らないけど2つ能力を持った男の物語。

プロローグ

少年は父に聞く。

「お父さんたちはどこに行くの？」

父は少年にこたえる。

「大丈夫、そんなに気にするな」

と父は少年の頭をなでる。

少年は兄に聞く。

「お兄ちゃんもかえってくるよね」

兄は少年に言う。

「あたりまえだろ？ちゃんと帰ってくるさ」

父は親友に言う。

「後のことは頼んだぞ、空也」

空也と呼ばれた男は答える。

「もちろんだ、だからお前もちゃんと帰ってこいよ」

「さあそれはわからないな・・・」

父は少年を抱きしめる。

「じゃあな、強く生きろよ」

兄は少年をなでながら言う。

「いいかい？知雅。」

お前の力は人を傷つけるものではなく、人を助けるものだ。だから

――

兄は間を開けて言う

「――」

刹那、強い風が吹く。

「さて、そろそろ行こうか、拓雅」

「そうだね、父さん」

二人は歩き出す。

少年はもう帰ってこない二人の背中を見送る。

そして、時は流れ――

鳥が窓の近くの気にとまり鳴いている。

「……何だ、夢か。」

少年は15歳になっていた。

「ずいぶんと懐かしい夢をみたものだ」

知雅は時計を見る。

「なんだ、まだ4時じゃねえか。もうひと眠りしようっと」

ブログ（後書き）

暇でしたので書いてみました。
もうほんと暇で暇で…（；^
^）

1話 学校始まるよー！（前書き）

はいはい、いきますよー

1話 学校始まるよー！

「おい！起きろ！カズ！」

誰かが呼んでいるけど眠いからいいか…

「クソッ！こうなったらあの妙技を…」

ガタガタと音が聞こえてくる…。まったく、今何時だと思ってやがる。

（うゝん。時計は何処だ…。これだな！）

なにに？4月5日月曜——

刹那

「はかなく散れ——！」

何かが突っ込んでくる

「甘いな」

俺はひらりと身をかわす！

「何い！って、うわああああ！」

どーん！といい音が部屋に響く。

「ぐおおおおおおおおお」

頭が膨らんでいる。

「頭…大丈夫か？」

「聞くぐらいならよけるな！」

「いや…俺が聞いたのは中身のほうんだが…」

「そっちかよ！それが幼馴染に対する接し方か！？」

「うん」

「鬼畜だ！鬼畜すぎる！」

「それはおいといて。そんな起こし方しなくても俺は時計を見れば起きるって何回言えばわかるんだよ。龍。」

「おいとかれた？！」

「どうせここに来たのは飯を作ってほしいからだろ？」

「まあそうなんですけど」

「じゃあ暴れるな、作らんぞ」

「すみません…」

よし！静かになった。さて、今日の朝食は…

「そういえば夏穂にも飯を作ってやらんと。ちよつと龍、二階の夏穂呼んできて」

と言うと、龍は「え？なんで俺が？」という顔をするので

「何もすることがなさそうだからだ」

「そ…うだね」

しよばーんとしながら龍が部屋から出ていく。

「さて、スクランブルエッグでも作るか」

10分後

知雅の部屋の前で夏穂が顔を赤くしていた

（ほつ本当に呼んでくれるなんて…）

3年前に夏穂はとある事情により知雅に助けられていて、それ以降惚れている。

（しかもご飯も作ってくれるなんて…キヤーー）
などと顔を赤くしていると

ガチャリと知雅の部屋の扉が開き

「何してんだ？お前は…」

不意に顔が出てきたおかげで

「——ッ！」

声がでない。

「顔なんか赤くしてないで、さつさと食わないと学校に遅れるぞ」
と言われ夏穂は腕時計をみると『7時55分』と表示されていた。
「8時15分にクラス分けが出されるから、早く食って準備しろ」
「う…うん！」

結果的に初めての朝食は一緒には食べられなかった。

8時10分

知雅や夏穂、龍は寮生活なので学校につくのは結構早い。

「しつつかし、夏穂。お前よくあんなに早く準備できたな。」

「基本的に早く食べられるから…」

「どうした？声小さいぞ？なあ、龍」

「なんでカズはこんなにも鈍いのかねえ…なあ？赤光さん」

「ほんとですっ！」

「あれ？龍なら大きな声出せるんだな。」

「——ッ！」（ボオオオオ）

夏穂が知雅に火を出す。

「あつちい！」

「…その火はどうかできないの？赤光さん」

そんな感じのくだらない話をしていると

「おーい！カズー！」

大きな声で呼ばれそちらを向くと…

声の割には体がかなり小さいのが走ってきた。

「よう、ヒロ」（知）「うつす、ちび」（龍）「おはよう、羽野くん」（夏）

「うん、一斉に言われると誰から返事をすればいいかわからないね」

『ハハハ、決まっているだろ？』

一泊おいて言う

「俺から」（知）「僕から」（龍）「私から」（夏）

「ええー、何こいつら。なんでこいつら息ぴったりなの」

『同じ寮生だからな。はっはっは！』

「赤光さん！君はこんな話し方しちゃダメだよー！」

と拓風が言つと

「うるせえ！」

と夏穂がいう。

『!?!』

野郎3人が驚く。

「あ…ごめん。今のはギャグです」

そんな会話をしていると

「ピンポンパーンポン。クラス張り出すぞ」

と放送がなり響く。

「よし！いっちょ行ってくるか！」

『おー!』

と会話していた知雅がふと気付く

「俺と話しても声が大きくなったな。夏穂」

「ふえ?…ッ!」(ボオオオオオ)

「あっちい!」

「お二人、それ以上やると迷惑だよ。特に赤光さん」

「す…すみません」

そうして4人はクラスを張り出された場所に向かう。

〈10分後〉

野郎一人がorzの形で泣いている。その傍らでは野郎二人が腹を抱えて大爆笑してる。

「なんで…なんで僕だけ違うんだ」

『わはははははははははは!』

泣いているのは拓風だった。

この能力強化学園高等部は基本的に2クラスある

で2クラスに学力と能力が均等になるように分けられる。

そして、夏穂はトップで拓風は2位に位置している。他二人はいたって普通の学力でありこうなったと思われる。

「まあ?ね?高校があるよ?ね?がんばろ?」

「うん…そうだね。僕がんばるよ!」

「そういうけど高校も一人ぼっちだったりしたら?」

「その時はもう自殺ものだね」

P p p p p P p p p p

「もしもし？理事長？ちよつと頼みたいことが――」

「やめろおおおお！」

「そうそう、今年みたいに来年も羽野を――」

『原因はおまえかあああああ！』

「え？なに？後ろがうるさいって？ごめんごめん」

『理事長とお前（知雅くん）はどういう関係だ（です）？』

と、そんなやり取りをみている男子生徒がいた。

その手からは氷が噴き出す。そして…

「くらえ！武田！」

と氷で知雅を攻撃してくる。男子生徒は思う

（この距離からのこの攻撃はよけられるはずがない。これで――）

男子生徒は知雅の顔を見る。男子生徒の考えとは別に知雅の顔には

笑みがあつた。

「いきなり攻撃してくるとはいいい度胸じゃねえか、冬助」

知雅の手が光に包まれ、手には火炎放射機があつた。

「ポっちな」

氷と炎がぶつかり大量の水蒸気が発生する。

周りの生徒たちが騒ぎ始める。

「クソっ！なんでだめなんだ！」

「おいおい、確かに攻撃してきていいって言ったが、今やることはねーだろ？」

「はっ！お前の事情なんて知ったこっちゃなんだよ。俺はお前に攻撃したいときに攻撃する。悪いか？」

「ああ、わる――」

いい終わる前に夏穂が口をはさむ。

「悪いです！」

「おいおい、今は俺のセ――」

「知雅くんはちよつと黙っててください！」

「ええー。…まあいいや。じゃあ先に行ってるぞ。」

他の生徒たちのほとんどはすでに教室に入っている。それに乗じて教室へ向かって歩き出す。そこで龍と拓風が

「あの冬助ってやつ、赤光さんに説教されて喜んでるように見えただが…」

「そうそう。あとなんであいつにいきなり攻撃されてたの？」
と一気に知雅に質問する。

「一気に聞くな、あともう時間ないから終わってないからな」

「赤光さんは大丈夫？あれて遅刻にならない？」

「俺が説明しとくから大丈夫だろ。冬助は知らないが…」

「ははは、ざまあないな」

「じゃあな。あとで」

1話 学校始まるよー！（後書き）

登場人物の名前は

たけだ

武田

かすまさ

知雅

あかひかり

赤光

なつほ

夏穂

あおぬま

青沼

りゅう

龍

はの

羽野

ひろかぜ

拓風

みずはら

水原

とうすけ

冬助

もうちょっといます

2話 新クラスの始まり（前書き）

話が長い長い。

ほんと、もとはかなり長かったよ

2話 新クラスの始まり

(…なんで毎年似たような自己紹介せねばならんだ)
そう知雅が思っている…

ガラガラガラ…とドアが開く音が聞こえ

「す…すみません。遅れました…」

と夏穂が入ってきた。

「べつにいいですよ〜(^^)」

先生は笑いながら言う。

「校則違反をした生徒に説教してたならなおさらいいZE」

(おいおい、今年の先生顔芸うまいな。(^^ω^^)みたいな顔してるぞ)

そう考えていると自己紹介は知雅の番になり

(めんどくせー)

と内心つぶやきながら

「武田 知雅 能力は武器使い よろしく」

というと、先生が

「え？この魔法の時代にまだ武器能力持つてる人がいたなんて(笑)
超弱そう」

その瞬間、教室内の空気が凍る。先生が「え？え？みんなどうしたの？」とうるたえている。そして知雅の手が光に包まれる。

「夏穂、保険室の先生呼んでおいでくれ」

教室のみんなが脱兎のごとく教室から出ていく。

「今なら言葉を取り消せるが…どうする先生よ」

「そんなこと言うのは、弱い奴だけだから取り消さないよ」

知雅の手にナイフがひとつ。

「そうつすか、じゃあ——」

1 泊おいて言う

「儚く…散れ！」

刹那、先生の髪の毛が空を舞う。

先生の顔に一筋の血が流れる。

「え…？」

先生は何が起きたか分からず、おそろおそろ後ろを向く。そこには深々と刺さったナイフがある。

そして、いつの間にか知雅の手に両刃剣があった。

「旋風陣」

そう言くと、知雅の周りの机が二つに切れていく。

「ひっ…」

なんだかねで10分後

「ふう疲れた」

そう言う知雅の傍らには担任が座り込んで泣き顔になっていた。

「わかりましたか？先生。俺は魔法なんかに負けませんよ」

「ご…ごめんなさい」

「わかればいいんですよ。しかし、初日から教室がこのありさまか…先生どうしましょ？」

そこで、話を聞いた理事長が到着。

「またお前か」

「へっへ、悪かったな。じいちゃん」

と言うと教室の周りにいた、野次馬が

『ええええええ！理事長をじいちゃん呼ばわり？』

と驚きを声にする。そこで知雅が

「やばい、みんなの前でじいちゃんって言っちゃった。どうしよ？」

「どうしようもなかるう」

なんだかねで時間が過ぎて

11時30分

「おい、待ったか？カズ」

俺の部屋にノックもなしに入ってくる。しかも彼女連れてきてやる。

「リア充爆ぜろ」

『ええ！？』

と二人声をそろえて驚く。なんていらつく二人だ。

「おい、なんで利亜を連れてきた？」

土神とは龍の彼女で、俺の幼馴染でもある。

「いや帰る最中に今朝のこと教えたら…」

「私も聞きたくなかったわけよ」

…なんでこいつこんなに口軽いんだろう？

「…まあいい。あと来てないのは夏穂とヒロだけか」

夏穂はいいとしても、なんでヒロは遅いんだ？

「まったく、今日は散々だぜ」

「そうそう、また新任の先生に力使ったんだって？」

「話が広がるの早いな。つーか、あれ新任だったのか。納得」

「え…？知らなかったの？」

「おいおい。幼馴染なのに俺の性格わからんのか？」

などと話していると

「ごめーん、遅れたー。」

とヒロがやってきた。さて、後は夏穂だけか。

「お前、なんで遅かったんだ？」

「ああ…。うちのクラスの先生があゝ熱血の先生でさあ」

「そいつは…可哀そうに」

あのゴリラのクラスになるとは…ほんと可哀そうに。

などと話しているとひとつの疑問が生まれる。

「お前ら飯食ったのか？食ってないなら今から作るけど…」

『お願い』

全員食ってない…だと…！

おいおい、材料足りんぞ。仕方ない…ここは

「おい、龍、利亜。ちよつとこれ貰ってきて」

『どこで？』

もらえるか知らないでよく生きてきたな…。特に利亜。

「学校の近くにあるスーパーのゲローの店員にこれを見せてこい。そしてたらただでもらえるから、このメモに書いてあるものもらってきて」

「りょーかい」「わかった」

「ヒロ、お前は鍋と肉もってこい。」

「え？」

「家のやつにいい肉をたくさんと鍋1つ持ってきてもらえ」

「どうして？」

「ちよつとすき焼きを夜にでも作ろうかとおもってな。どうせおまえら夜も食って食べていくつもりだろ？」

『もちろん！』

「だからだ」

『なるほど！』

「さて。お前ら、行つてこい！」

「あれ？カズは何するの？」

龍：お前はアホか？

「昼飯の準備だ。先にお前らの分作るから。帰ってきたら食えるようにな」

「よし、わかった。じゃあ行こうか利亜」

「うん！」

いちやいちゃと音が聞こえそうな感じで部屋から出ていく。それを冷めた目で見守る俺とヒロであった。

「お前も早く行け」

「うん」

そういつて走って出ていくヒロ。それを見送ってから俺は

「さて、昼飯はチャーハンだったな」

2分後

ピンポン

「あれ？こんなに早く帰ってこれたっけか？」

といている最中の卵を置いて、ドアに向かう。

「どなた？」

「私です。夏穂です…」

「なんだ、お前か。ほら入れ。」

「あ…あれ？み…みんなは？」

「ちよつと今日の夕食と昼食の買い出し中」

「ど…どうして？」

「今日の昼はチャーハンで材料が足りんから、あのいちゃいちゃ力ツプルに行かせてな。それでヒ口に、肉と鍋を家のやつに持ってこさる為に出払っている、そんな感じだ」

「ちよちよちよちよちよつとまつて。じゃあ今は…二人だけ？」

「そうだが…何か不都合でもあるか？」

顔を赤くして口をパクパクさせている。お前は茹でたたこか？

「おまえはタコか？」

「あ…足はそんなにないよ！」

俺が言っているのは顔のことなんだが…

「さて、料理再開するか」

「私も手伝うよ、私まだ何もしてないし…」

「おー、それは助か…」

あ…、そういえばこいつ料理下手だっただけか

「らないから、待っていてくれる？」

「いやです！」

「いや…俺は一人のほうが作りやすいから…な？」

と言うと、夏穂は目を潤ませ

「うええええん」

と泣きだす。仕方ないなあ…、きっと俺はまだ食わないから

「いつしよに…作るか？」

「ふえ？」

「ほら、こい。今日はチャーハンだからちよいと見てな」

「うん」

2話 新クラスの始まり（後書き）

まだまだいくぜい！

3話 昼飯・夕食（前書き）

今回は短いな

3話 昼飯・夕食

そのころ寮の前では…

「昼飯楽しみだね。利亜」

「そうねー」

「おーい、ラブラブなお二人さん！」

「おう、チビ！…なんかすごい量だな」

「今夜は楽しみだよ。なんせすき焼きだからねー」

そんな会話をしていると知雅の部屋の前に…

『ただいまー』

「おう、さつさともらってきたのをよこせ」

「おかえりなさい」

テーブルの上においしそうなチャーハンが乗っている。

「もうたべていい？」

「さつさと食え」

『いったっだきまーす！』

3人そろってぱくりと食べる。

3人に衝撃が走る！

「こ…これは、もしかして赤光さんが作った？」

「うん！おいしい？」

無邪気な笑顔で聞く。

「う…ん」

「まずくは…ないな…？」

「新しい…味だね」

3人は汗を滝のように流しながら答える。

「さて、じゃああとは2人分でいいか？」

『ボク（ワタシ）ノブンモツクツテクダサイ』

3人はロボットののように言う。

「…だよー」

3時

夏穂が服を着替えに部屋からでていったので

「お前ら…大丈夫か？」

『…』

ちよいちよい、痙攣してるぞ。

「ほら、飲め。気分が良くなるから。」

と俺は夏穂の目を盗んでもらってきた薬を飲ませる。

ゴクゴクと息ぴったりで飲んでいく。

『い…生き返る…』

おお、もとに戻ったな。

「なんで、ご飯作ってくれないんだよ！楽しみにしてたのに」

「い…いやね？あいつが作らせてって泣き顔で頼んできたもんだから…」

「だから！1年のころから言ってるでしょ！カズはなっちゃんに甘いの！」

（…利亜。男つてものは女に弱いものだぜ）

そんなことを思いながら、説教（？）を受けることを選択した俺だった。

夕食

「すき焼きはやっぱおいしいね」

『そうだねー』

「でも、1番はみんなで食べてるからかな？」

『そうだねー』

などとしやべりながらすき焼きを食す。

ふと、知雅は気づく。

（あれ？今日集まったのは俺と冬助の関係を聞かためじゃなかったか？）

4話 ちょっと授業（前書き）

世界観の説明を入れました

4話　ちよつと授業

新しいクラスになり早1月。

この中央区立能力者育成機関学園中等部で学ぶのは主に戦闘方法であるが、他にも生きていくために必要なことも学ぶ。

「えー、みなさん。今日は現在の世界情勢についての授業です。まずはこの世界に存在する5つの国の名前を言える人は…いないよねー」

先生の質問にみんなは啞然とする。そして、全員が心の中で叫ぶ（それは1年の時にやったぞ?!）

「えー、まずは国の名称から――」

「せんせー。それやりましたよ」

「ええ？いつ？」

先生が不思議そうに聞く

『2年前です』

「うそおお！」

『ほんとです』

「そんなー」

と先生が涙目になる。それでも先生は言う。

「とりあえず、答えてください」

そう言われ、夏穂が答える。

「私たちのいる国は火の国、別名イグニスです。隣にある国が水の国、別名セイレーンです」

鼻をかみながら先生が答える。

「正解です。次は…そうだねえ、武田君言つて」

「へーい。セイレーンの上に位置している国が土の国です。別名ガイアです。先ほどの2つの国とこのガイアはそれぞれ同盟関係を築いています。これが三角同盟と言われる同盟です」

「いいねえ、次は侵略軍の国の名前を…青沼君！」
「！」

龍の頬に汗が滴り落ちる。

「…青沼？どうしたの？」

「すみません、わかりません」

「…そ、そうですか。わかりました。では暗森君」

クラスの窓側の列の最後の席の男子生徒が立ち上がる。

「まずは侵略国家の中心国は闇の国、別名ヘルです。そのヘルに支配されている雷の国、別名ツールです。」

「はいはい、そうです。じゃあ滅ぼされた国の名前です。これは…稲葉君お願い」

暗森の正反対の席の少年が立つ。

「滅ぼされた国は同盟国四つ、侵略国一つです。滅ぼされた国名は武の国、別名サムライ。風の国、別名ウインディーネ。雪の国、別名フェンリル。そして、光の国、ヘヴンです」

「はい、それだけで十分です。ところでみんななどこの出身？」

「ここ」×1「2」水×3「土」×「武」×1「闇」×1

「え！このクラスサムライとヘルの人いるの？だれだれ？」

そこで二人の手が挙がる。

「俺」「俺」

言ったのは知雅と暗森の二人。

「俺が武の国。能力からわかるだろ？先生」と知雅が言う。

「俺は…闇の国出身です。追われる身ですけど」
そっという話をしていると授業が終わる。

ここで説明を少々

現在は同盟国と侵略国と世界が二つに分かれている。

ことの始まりは25年前だった。

安定した世界情勢だった世界が崩れる。

闇の国が突如として周りの国へ攻撃を開始した。

古くから友好関係を築いていた武の国も闇の国と共に周りの国へ攻撃を開始した。

そこで残りの国は連合を築いて二つの国に防御姿勢を始める。

その状態が17年続き一人の男が現れる。その男は何かにとり疲れたように2つの刀だけで5つの国を滅ぼした。

この出来事のおかげでこの長く続いた戦いが1時的に終了した。

学校終了後

「もういつそのことカズにご飯作ってもらおうか。」

『いいねえ！それ！』

こいつら…4人で何言ってるんだ？

「作らんぞ、俺は」

俺がそう言うとき

「だめ…なの？」

夏穂が涙目になりながら言う。…くそ！こいつら。

『ああ、夏穂を泣かした！』

絶対こいつら計画立ててたろ…。

「じゃあ夏穂だけな」

そう言うとき

『ええ！』

うるさいなあ…

「シャラップ！いいか、2度は言わないぞ。俺は夏穂にしか作らない」

室内に静寂が訪れたんだが…なにかいったか？俺。

「よかったね、夏穂。まるで夫…」

「ッ！」

こいつら…できる！

「じゃあな」

と言いながら俺の部屋から夏穂を置いて出て行きやがる…。

「…」

またしても沈黙か…

「ふっ…」

と夏穂が口を開いた。が一言なので理解できなぞ…

「ふっ？」

「ふつつか者ですがよろしく願います!」

「それおかしyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyyy!」

翌日知ったがこの声は学校まで届いたらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1934y/>

能力が使える世界の事情

2011年11月22日22時52分発行